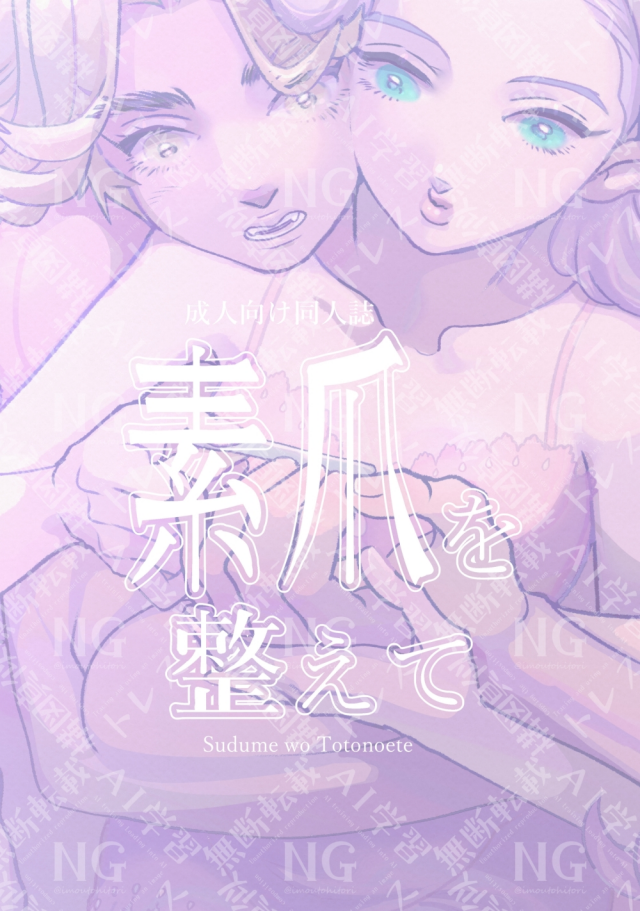




成人向け同人誌

素爪を 整えて

Sudume wo Totonoe

非公式のエッチな同人誌です。
お話の後半に無声部分がありますが、
仕様ですのでご安心ください。

ケヴィン……
お前は強くなったが
後継者としては

まだまだ
世間知らずだ

怒れる獣人たちが
言い聞かせるのに
統率力も足らんし

心根が
優しすぎる

だが、
その優しさが
あれば

人間たちとも
上手くやっていける
かもしれん……

そこで

お前の優しさを
強さに変えて
活かすために

暫くアルテナで
「人間の常識」を
学んで来るといい……

獣人王……
言った

オイラ、
強くなった

でも、

まだまだ
王様……ムリ

アルテナで

人間のこと
学んで

そしたら
やさしく

つよい王に
オイラ、
なれるって……

手紙、書くの
苦手だから

直接、伝えに
行けって……

アルテナの
人たち……
特に

理の女王様は
賢いからわかって
くれるって……

あの……
わかって
もらえたか？

オイラの
話……？

理解して
いますよ

ここで留学
したいのですね？

アンジェラ

貴女はどう
思いますか？

えっ……

勿論
大歓迎よ
お母様！

だって、
ケヴィンは……

私が
旅でみつけた

魔法より
ステキな人
なんですもの！

えっ……

そうですか
……

！

それでは
決まり
ですね

ケヴィン王子の
留学を認めます

獣人王にも
文を出して
おきますね

「2、3年
お預かり
します」と

やったあ♡
お母様、
大好き！

では私は早速
文の準備を
進めます

いいですか？
アンジェラ

殿方の前で
お転婆のしすぎは
いけませんよ

はい！お母様

城を案内して
差し上げてね

空き部屋は
沢山あるので

王子のお気に
召された所を
お使いください

じゃあ、
よろしくね
アンジェラ

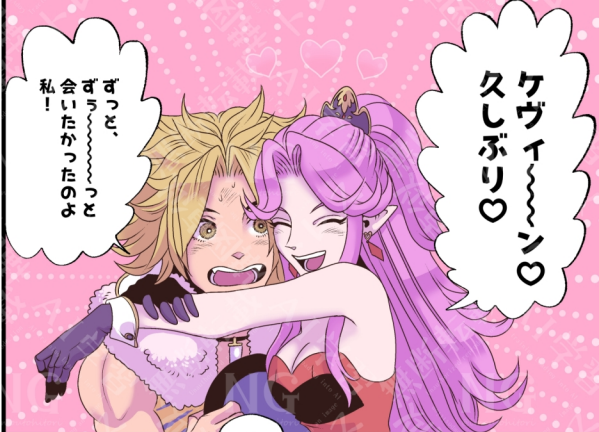
はい！

そわ

そわ

ケヴィン
久しぶり♡

ずっと、
ずっと、
ずっと、
会いたかったのよ
私！



あんまり
恋しいから
そっちに行こうと
思ってた

ダメ元で
獣人王様に
お手紙したのよ

！

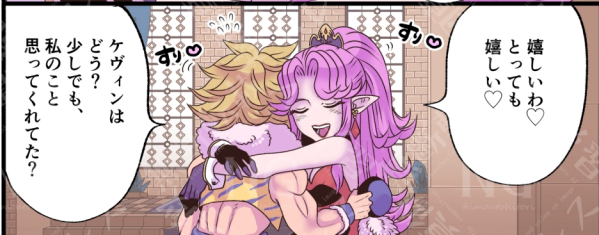
そしたら
まさか！

こんなに早く
ケヴィンの方から
来てくれるなんて♡



嬉しいわ
とっても
嬉しい♡

ケヴィンは
どう？
少しでも、
私のこと
思ってくれてた？



う、うん……
魔法なくなつて、

寒くないかな
とか……

元氣してる
かなとか……

思つてたよ！

うふふ

ありが
と♡

おかげさまで
アルテナは
ご覧のとおり……

魔法がダメに
なつたときの
ために

「蒸気熱」や
「機械」の開発も
積極的にしてた
から

お城、暖かい
でしょう？

ほんと
だ……！

魔法の勉強も
難しかったけど
科学もかなり
難しくつて……

でも、それを
庶民にまで
行き渡らせるのが
今の私の目標よ

アンジェラ
すごい！
前向きだね

うふふ……♡
ありがと♡
ケヴィンにも
教えてあげるね

いっぺんは
追放された
身だけど……

私やっぱり
アルテナが
好きだから……

寒さなんかには
負けたくないの

何とかして
お母様と民と
暮らしたい……

なんてね♡

魔法では
頭が上がらなかった
ホセ爺さんに

色々教えてあげる
立場になって
結構楽しいの♡
ホントは♡

ケヴィンは
どうしてた？

イジワル
されたり
しなかった？

カールは
元気してる？

大丈夫！

カールも
オイラも
元気だよ！

ここまで
どうやって来たの？
まさか
また泳いで？

うん、途中
話のこと
わからなくなっ
て3回戻った！

まあ3回も？！
大変だった
でしょう？！

ね、

ケヴィン……
その……

キス……
しても
構わない？

あんたが
愛しくって

キ、
キス……？
何……？

言葉で
伝えきれない
想いを……

唇と唇で
するのは

chu
♡

トクベツな
相手同士

唇にのせて
伝えるのよ

私は
今スグでも
いいんだけど……

ケヴィンは
きつと
まだだから……

ドキ
ドキ

今はまだ、
ほっぺで

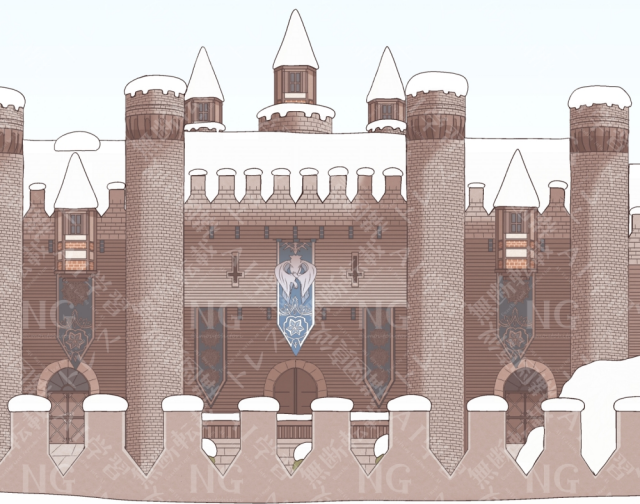
我慢するわね
♡
♡

お城を
案内するん
だったわね

どこから
行こうかしら

私の
お部屋と、

お風呂と……
書庫と……
お手洗いも
必要よね



「爪、キレイになった！」

大喜びではしゃぐケヴィンの姿を、アンジェラは微笑ましい表情で見つめていた。自身の手柄でケヴィンを笑顔に出来て喜ばしい半面、手元に夢中でこちらの方は全く見えていない様子に、少しの嫉妬心が生じるのを我慢できなかった。

「爪ばかり見てないで」

そう言うアンジェラは天蓋ベッドのカーテンを締め、

「私だけを見て」

とケヴィンに言った。

自身が纏っていた薄布を脱ぎ捨て、ケヴィンの腰布に手を掛け、するりと脱がす。彼が身動き出来ないよう、その逞しい胸元に跨り、

「良い子ね」

と艶のある声音で囁いた。

さすがのケヴィンも、彼女がいま何を望んでいるのか本能で理解した。そして、自分自身もそうなることを望んでいたかのように体内の血が滾り、腰元の一点がそそり立つのを感じていた。

初めての行いとは思えぬほど、ふたりのセックスは情熱的だった。

アンジェラは、後ろ手を伸ばしてぎりぎり届く場所に、先ほど整えた両の爪先を出し入れして、

「ここはどうかしら？」

と、今さっき恋人同士になったばかりのケヴィンに問うた。

「なんか、ヘンな感じ……でも、ちよつと、気持ちいい、かも……？」

人一倍素直な彼の、率直な応答にクスリと微笑むアンジェラ。

こんな言葉を交わしながらも、ふたりの動きは止まることなく続いた。

肉体同士が合わさる音は激しさを増し、絶頂へと速度を上げて歩み寄る。

ケヴィンとアンジェラはあれやこれやと体位を変えては求め合い、お互いの気持ちの一つになった悦びを心と身体で感じとったのだった。

事を終えた彼ら、特にアンジェラはくたくたで、ベッドに重なって

腹這いになり、他愛もない話をして過ごした。

「愛する人に抱き締められること」「愛されること」に飢えていた

アンジェラは、背中に感じる体温と重みにこの上ないしあわせを感じ、密かにマナの女神様へ感謝の祈りを捧げたのだった――。